ダウン症をもつ子ども及び健常児とその母親との相互作用に関する研究：台湾と日本の比較

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 黄, 愫芬
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4700

氏　　名	黄　愫芬
本　　籍	中華民国
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	社博甲第41号
学位授与の日付	平成14年3月22日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第4条第1項）
学位授与の題目	ダウン症をもつ子ども及び健常児とその母親との相互作用に関する研究 ―台湾と日本との比較― (Mother-child interaction in children with Down syndrome and with no disability: Comparing Taiwan and Japan)
論文審査委員	委員長　大井　学 委員　片桐和雄，大瀧敏夫

学位論文要旨

論文の構成

本論文は，3部10章から構成される。第I部序章では研究すべき問題の所在を述べた。第1章は三つの節からなる。第1節では本研究の背景，第2節では本研究の目的，第3節では本論文の構成について述べた。第2章では，英語圏と日本，台湾においてこれまで行われたダウン症をもつ子どもとその母親の母子相互作用に関する研究を整理し，言語発達初期のダウン症をもつ子どもと母親との母子相互作用に影響を与える要因について概観し，若干の考察を加えた。第3章では，米国と日本，台湾の母子関係に関する比較文化研究を整理し，台湾と日本におけるダウン症をもつ子どもとその母親及び健常児とその母親の母子会話について，どのような差が生じるのかについての仮説をたてた。

第II部以降で観察によって得た資料を検討した。本論文の当初の計画では，ダウン症をもつ子どもと健常児がその母親とのコミュニケーションをとるときの，障害の有無，文化差，場面差の三要因の交互作用に焦点を当てて，台湾と日本，自由遊び場面と食事場面を一括して比較検討する予定であった。しかし，膨大なデータの収集や子どもの言語年齢を統制するのに長期間を要したため，データ収集を行う毎に結果をまとめることになった。本論文ではそれに従って論述を進めた。

第II部は六つの章からなる。第4章から第7章までは，台湾と日本のダウン症をもつ子ども及び健常児とその母親の会話のやりとり，母親の発話機能，母親からの質問行動が，場面によってどう違うのか，ダウン症をもつ子どもと健常児との間でどのように違うのか，そして，英語圏の先行研究の結果が，台湾と日本にもあてはまるのかどうかという，3点について明らかにした。第8章では，複数場面におけるダウン症をもつ子ども及び健常児とその母親の会話のやりとり，母親の発話機能，母親からの質問行動が台湾と日本とでどのような差があるかを明らかにした。第9章では，ダウン症をもつ子どもと母親との食事場面での会話が，台湾と日本とでどのように違うのかを健常児とその母親の会話と比較することで検討し，外山・無藤（1990）の研究の結果が，台湾と日本での結果に再現されるかどうかを明らかにした。

第III部第10章は，研究全体のまとめ，今後の課題と展望について述べた。

以下，各部毎の要約を示す。

第Ⅰ部　序章

1970年代以降，ダウン症をもつ子どもにおける母子相互作用の研究が英語圏で取り上げられるようになった理由は，子どもの言語発達に対して，母子相互作用の及ぼす影響力がきわめて大きいと考えられたからであった。台湾及び日本ではダウン症をもつ子どもにおける母子相互作用についての研究はほとんど行われてこなかった。それ自体が，子どもの言語発達と母子相互作用とのかかわりに関する，これら二つの文化と英語圏との違いを示唆するものとして興味深いと考えられた。英語圏では基礎研究の成果を踏まえた，ダウン症をもつ子どもに対する相互作用を介した言語指導のプログラムが提案されており，その一部は台湾と日本にも取り入れられていた。しかしこれら両国におけるダウン症をもつ子どもの母子相互作用の特徴ならびにその言語発達との関連が英語圏と同じとは限らないため，相互作用を介した言語指導の可能性を両国においても追求するとすれば，相互作用の性格についての理解が必要となると思われた。本研究は英語圏の研究の結果と台湾及び日本の結果とを照らし合わせながら，台湾と日本のダウン症をもつ子どもの母子相互作用についての理解を得ようとしたものである。

ここでは，台湾と日本でのダウン症をもつ子どもの母親及び健常児の母親との交流経験を通じて筆者自身が得た印象から，台湾と日本におけるダウン症をもつ子どもとその母親及び健常児とその母親の母子会話について，どのような差が生じているのかについての仮説をたて，その妥当性について検証することを本研究の第一の目的とした。本研究の第二の目的は，場面の違いによって，ダウン症をもつ子どもとその母親及び健常児とその母親との相互作用において，母子の会話に違いが生ずるのかどうかについて検討することとした。本研究の第三の目的は，子どもの言語水準が同じであれば，ダウン症をもっているかいないかにかかわらず，母親の発話機能は変わらないという英語圏での先行研究の指摘が，台湾と日本においてもあてはまるのかどうかを検討することとした。

第Ⅱ部　台湾と日本のダウン症をもつ子ども及び健常児と母親とのコミュニケーション

第4章の結果から台湾では，自由遊び場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，発話数，ターン数が多く，指示，質問の割合が高く，応答が低かった。食事場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，質問，情報，評価の割合が高く，応答が低かった。自由遊びと食事を合わせた全場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，質問，評価の割合が高く，応答が低かった。このことから，子どもがダウン症をもつか否かが母親の会話スタイルに与える影響は，場面によって異なるということが示唆された。また，英語圏の先行研究の結果は台湾にあてはまらなかった。

第5章の結果から日本では，自由遊び場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，質問の割合が高く，評価，応答が低かった。食事場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，質問の割合が高かった。自由遊びと食事を合わせた全場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，質問の割合が高く，応答が低かった。このことから，子どもがダウン症をもつか否かが母親の会話スタイルに与える影響は，場面によって異なるということが示唆された。また，英語圏の先行研究及び第4章の台湾で行った研究の結果は日本にあてはまらなかった。

第6章の結果から台湾では，自由遊び場面でダウン症をもつ子どもの母親と健常児の母親で，五つの質問タイプに，群間差は見られなかった。食事場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて指示的質問の割合が高かった。自由遊びと食事を合わせた全場面でダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，指示的質問の割合が高く，確認要請の割合が低かった。このことから，子どもがダウン症をもつか否かが母親の会話スタイルに与える影響は，場面によって異なるということが示唆された。また，英語圏の先行研究の結果は台湾にあてはまらなかった。

第7章の結果から日本では，ダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，自由遊び場面では情報質問の割合が高く，確認要請が低かった。食事場面ではダウン症をもつ子どもの母親及び健

常児の母親とに，群間差が認められなかった。自由遊びと食事を合わせた全場面で，ダウン症をもつ子どもの母親は健常児の母親と比べて，情報質問の割合が高かった。このことから，子どもがダウン症をもつか否かが母親の会話スタイルに与える影響は，場面によって異なるということが示唆された。また，英語圏の先行研究及び第６章の台湾で行った研究の結果は日本にあてはまらなかった。

第８章の結果からは，日本の母親より台湾の母親の方が「発話数」が多く，「ターンの長さ」が長く，台湾の母親より日本の母親の方が「ターン数」が多く，会話における「母親の主導権（発話数のバランス，ターン数のバランス）」は台湾の母親の方が日本の母親よりも強くなっていた。台湾の子どもより日本の子どもの方が「発話数」「ターン数」が多かった。発話機能から見ると，日本の母親より台湾の母親の方が「指示」「情報」「評価」の割合が高かった。一方，台湾の母親より日本の母親の方が「質問」「応答」の割合が高かった。また，日本の母親より台湾の母親の方が「テスト質問」「指示的質問」の割合が高かった。一方，台湾の母親より日本の母親の方が「情報質問」「確認要請」「明確化要請」の割合が高かった。また，「評価」「指示的質問」の発話の割合と子どもの障害の有無との関係は，台湾と日本で異なっていた。以上により，台湾の母親の子どもとの会話のやりとり，母親の発話機能，質問行動と日本の母親の子どもとの会話のやりとり，母親の発話機能，質問行動とが異なることも明らかになった。このことから，母親のコミュニケーション・スタイルは文化の違いに影響されることが考えられた。

第９章の結果から食事場面では，ダウン症をもつ子どもか健常児かにかかわらず，発話内容では台湾の母親より日本の母親の方が「食べる」「味」「けじめ」の割合が高かった。一方，日本の母親より台湾の母親の方が「マナー」「会話」の割合が高かった。また，発話形式では日本の母親より台湾の母親の方が「情報提供」「母親の感想・意見」の割合が高かった。日本の母親と台湾の母親は食事場面での，子どもに対する発話内容，発話形式が異なることが明らかとなった。一方，国による違いを越えて，ダウン症をもつ子ども，健常児共に母親は子どもの表出言語年齢が１歳児である場合よりも２歳児である場合に，「会話」「質問」「情報提供」の割合が高かった。また，ダウン症をもつ子どもと健常児のいずれの母親も共に２歳児よりも１歳児に対して，「促す」の割合が高かった。この結果は外山・無藤（1990）の日本の健常１歳，２歳児についての研究の結果と一致した。また，国による違いを越えて，健常児の母親よりもダウン症をもつ子どもの母親の方が「代弁」の割合が高く，「会話」が低かった。このことから，食事場面での母子会話も子どもがダウン症であるか否かに左右されていると思われた。また，「代弁」の発話の割合と子どもの障害の有無との関係は，台湾と日本で異なっていた。「禁止」の発話の割合と表出言語年齢との関係は，ダウン症と健常児で異なっていた。

第Ⅲ部　研究のまとめと展望

本研究の結果及びそれについての考察，今後の課題と展望の概略は次のとおりである。台湾と日本のダウン症をもつ子どもの母親は質問が多く，応答が少ないという結果は，精神年齢，生活年齢マッチで行われた英語圏の研究と一致しており三つの言語圏に共通といえた。ただし大きな違いは，英語圏のMLU（平均発話長）マッチ研究ではそのような差がなかったが，台湾と日本ではMLU（平均発話長）マッチでも差があるという点であった。また，他方では，場面別に見ると，母親の発話機能の違いと子どもがダウン症であるか否かとの関係は，台湾と日本で異なる面も認められた。また，台湾と日本では，子どもの言語能力の発達によって，食事場面での母親の話し方に違いが見られることも明らかとなった。子どもがダウン症であるか否かは，一方で文化の違いと関係なく母親のコミュニケーション・スタイルに影響すると同時に，他方で文化によって影響のしかたが異なるといえた。また，ダウン症の有無が母親の発話機能に与える影響には場面による違いがあることも明らかとなった。

台湾と日本の結果の違いについて検討をすすめる際の手がかりとして，分析を通じて次のような印象が得られた。両国の目立った違いは，子どもに対する質問のしかた，及び子どもの非言語行動に対する対応において認められた。台湾の母親は子どもの行動をあまり注意深く観察しておらず，またそ

こから子どもの考えを読みとろうとはしないで，子どもが自分の考えを自ら表現するように求める様子が見られた。一方，日本の母親は子どもの行動をいつも共感的に見守り続け，その背景を推測し，子どもの行動からよみとれた内容について確認を求める様子が見られた。また，両国の母親の質問の使い方には別の違いも見られた。子どもが何か自発的な行動を始めた場合，台湾の母親は指示的質問で子どもの行動を統制しようとするのに対し，日本の母親は子どもの意図を母親に示すように求めるといったことが見られた。このように両国の母親が質問によって行おうとしていることには大きな違いがあるように思われ，かつそれは子ども自身の非言語行動に対する母親の対応のしかたの違いとも結びついているようであった。子どもがダウン症である場合は，それぞれの国の特徴が健常児に比べてより強くあらわれてくると考えられた。本研究で得た結果のうち，両国の違いについては，こうした視点から改めて吟味してみる必要があると考えられた。また，英語圏で行われた研究の結果と台日両国の結果との関係も上記のような視点から見直すと興味深いのではないかと思われた。ダウン症であれ健常児であれ言語水準をマッチさせれば母親の話し方は英語圏では差が認められなかったが，台日両国ではダウン症児は健常児より多くの質問を母親から受け，より少なくしか応答をしてもらっていなかった。英語圏と台日の違い及び，台日間の違いついて比較することによって，三つの文化における母親の子どもに対する質問と非言語行動への対応についての類似と相違がより立体的にとらえられるのではないかと考えられた。

Abstract

The purpose of the present study was to compare mother-child interaction in Taiwanese children with Down syndrome with that in their Japanese counterpart. The participants of the study were 20 Taiwanese and 20 Japanese children with Down syndrome, 20 Taiwanese and 20 Japanese children with no disability, and their mothers. Each mother-child dyad was videotaped at their home during free play and at mealtime. In each country, the two groups of children were matched for ELA and MLU. The results were as follows: (1) The mothers of Taiwanese children with Down syndrome produced more utterances, turns, directives, questions, information, evaluation, directive questions, and fewer responses, clarification requests, than the mothers of Taiwanese children with no disability. (2) The mothers of Japanese children with Down syndrome produced more questions, requests for information, and fewer evaluation, responses, clarification requests, than the mothers of Japanese children with no disability. (3) The mothers of Taiwanese children produced more utterances, directives, information, evaluation, test questions, directive questions, longer turns, and fewer turns, questions, responses, requests for information, clarification requests, confirmation requests, than the mothers of Japanese children. (4) The mothers of Japanese children indicated smaller maternal dominance of utterances and turns than the mothers of Taiwanese children. (5) The mothers of Taiwanese children produced more "manner", "conversation", "information", "mother's comment", and fewer "eat", "taste", "Kejime" (Asking before-meal ritual, or prohibiting to play while eating) than the mothers of Japanese children. (6) Diagnosis × ELA interaction for prohibition was significant. (7) Diagnosis × country interaction for evaluation, directive questions, "speaking for child" was significant. (8) The results indicated that it would be undesirable to characterize maternal communication style using data collected in an only situation.

論文審査結果の要旨

本論文のもつ学術上の意義は３つ指摘できる。第一は，台湾及び日本でこれまで研究が乏しかったダウン症をもつ幼児とその母親との伝達的な相互作用の特徴について，十分な大きさのサンプルから得た資料に基づいて，厳密にマッチされた統制群との比較を通じて浮き彫りにしえた点である。言語の発達水準でマッチした健常児に比べて，ダウン症を持つ幼児が母親から応答を得ることが少なく，かわって質問や指示を受けることが多いという知見は，相互作用を通した彼らの言語獲得支援を計画する際に考慮すべき，重要な臨床的意義をもつ。第二は，ダウン症を持つ子どもと母親との相互作用のあり方が，それの生じる場面に左右されることを見出し，この分野の研究方法論上の検討課題を提起した点にある。英語圏で活発に行われてきた同種の研究で必ず取り上げられる自由遊び場面に加え，あまり関心が払われてこなかった食事場面にも目を向けた結果，ダウン症を持つ子どもの母子相互作用をより多角的に捉える必要性が示されるに至った。

第三の意義は，提出者が９年に及ぶ滞日経験から持つに至った障害のある子どもと母親とのかかわりの文化差に関する直観を，信頼できる検証可能な手続きによって把握した点にある。これはさらに２つに区別される。一つは，英語圏の場合子どもの言語能力が同じ水準にあればダウン症をもつか否かによる母親の会話スタイルの違いが見出されていないのに対して，台湾と日本のいずれでも違いがあるという知見を得た点である。これは，ダウン症をもつ子どもの言語を母子相互作用において位置づけるやり方が，英語圏の母親と台湾・日本の母親との間で異なることを示唆し，言語とコミュニケーションの障害にかかわる異文化比較研究上の興味深い課題を投げかけている。もう一つは，台湾と日本との間の顕著な差をダウン症をもつ子どもの母親の相互作用スタイルに見出した点である。台湾の母親が命令質問を健常児よりもダウン症を持つ子どもに多用するのに対し，日本ではそうした差が見られず，ダウン症の有無にかかわらず情報要請を多用していた。子どもがダウン症であることが母子相互作用に及ぼす影響には大きな文化差があることが示唆された。

以上のように，本論文は重要かつ興味深い知見をいくつか提供しており，論究の程度がやや浅いといううらみは残るものの，その克服は提出者の今後の課題とみなし，審査委員は全員一致で博士（学術）の学位の求める水準を満たすものと考える。